

多言語活動(ポリグロット)によるイベント創生

聖徳太子没後1400年、関西文化首都構想と大阪万博、うまやどと多文化共生

浜田真悟 (シナリオ25)

ポリグロット、多言語シャーマン、関西文化首都構想、大阪万博、うまやど、聖徳太子、没後1400年、多文化共生、ムーンショット

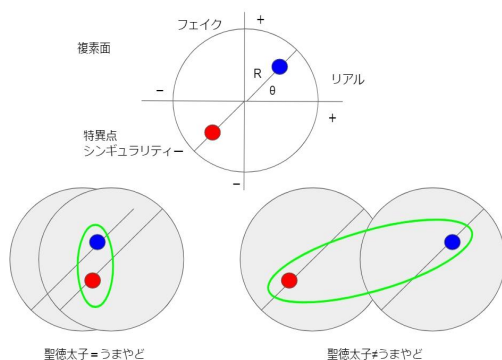
【1】目的

2022年は聖徳太子没後1400周年という年となり、平城京1300周年をむかえた2020年とちかく、極めて特徴のあるイベント類が京阪奈地区を中心に催されている。この社会事業のうねりは、2025年にむかえる大阪万博ならびにその連携プログラムである関西文化首都構想によって文化社会的にも盛り立てられている。ここでは、大阪万博に関連付けられた関西文化首都構想のなかで、聖徳太子没後1400周年がもつ射程を同構想のなかで吟味し、聖徳太子もしくは厩戸皇子(うまやど)という人物の持つ国際文化性をポリグロット(言語シャーマン)ととらえて、この多言語シャーマンを文科省において提唱されているムーンショット的存在とし、ポリグロットイベントもしくは多文化共生イベントがどのように同構想のなかで生かせるか、活用されるかを論じる。

【2】方法

言語シャーマンである「うまやど」を模擬指標としてサイバー言語空間の中に定立し、この中でうまやどに対して抽出しうるパラメーターを設定する。ただし、歴史実態としての聖徳太子と、数値シミュレーションの統合主体であるうまやどは別個の存在として認識しておく。

近年、歴史研究並びに歴史教育の考察の一つとして、聖徳太子=厩戸皇子がとりざたされることがある。「うまやど」とは、聖徳太子の超人伝説「聖徳太子が一度に10人の話を理解できたのは本当か?」というものであり、このうまやどの言語シャーマン性(ポリグロット)をもって、本稿では、2020年に刊行した学会発表論文(*)において展開した主張を「うまやどポリグロット性」と呼ぶことにする。



この方法では、歴史の実体「聖徳太子」と言語シャーマン「うまやど」実態が分離表現される。疑似数理的モードにおいて「うまやど」の多言語性を一方で確保し、その政治的実存「聖徳太子」も同時に存在する。この二つの実態は、イベント生成過程で確定される特異点はすべて経路積分「うまやどコントロール」から生成される。ここで二つの視点が生じ、「聖徳太子=うまやど」説と「聖徳太子≠うまやど」説によって類型化される。聖徳太子とうまやどの言説空間において特徴的なものを取りだした

ものが、このコントロール上での特異点とみなせばよい。

言語複素面でのイベント生成と、特異点構造

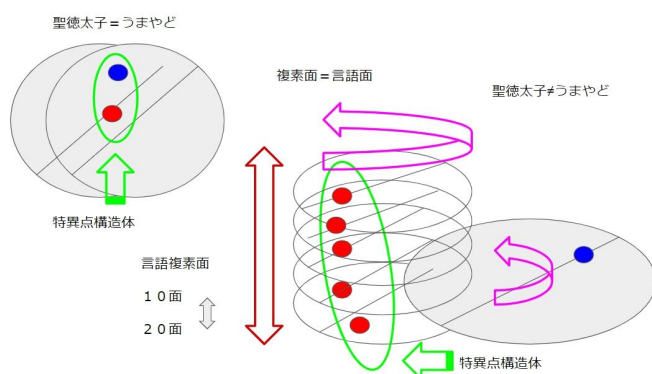
多言語シャーマンである「うまやど」が擬態として取る方法は言語の数理的組み合わせからは無数にあるが、ここでは文化社会上のイベント生成を念頭に置いて、つぎの3つに分類する。これらの3群の中から言語を選択し、学習効用のよい言語組み合わせ、イベントにおける存在効用を高める組み合わせを使って、言語パスを特定する。ここでG7言語

語、G10言語、古典語希少言語は言語経済上の分類である。

- 1) G7メジャー言語 (英、仏独西伊露)
- 2) ブリックスG10言語 (中国語、アラビア語、トルコ語、韓国、ヒンディー語、モンゴル語、ハンガリー語、ポルトガル語、ベトナム語、インドネシア語)
- 3) 古典語・希少語 (古希、羅語、ヘブライ語、サンスクリット語、満洲語、チベット語)

【3】結果

利用者 (うまやど疑似シミュレーター) の大多数は1) G7メジャー言語にとどまり、2) ブリックスG10言語にまで至る割合はかなり低い。さらに、古典語・希少語にいたる言語複素面にイベント生成をできるものは僅少である。言語複素面における特異点構造体はゲーム化することができる。



大阪万博・関西文化首都構想における言語演劇 (連想ゲーム) の実験室

実験の手法は次の通りである。

- 1) うまやどに適した劇作法スタニスラフスキーメソッド
- 2) 一人一言語でうまやどを抜擢する。10-20言語
- 3) 海外の古典との交流 (古希、羅語、ヘブライ語、サンスクリット語、満洲語、チベット

語) 4) G7言語複素面以外の多極化構造、多極化世界の表現。5) トランスヒューマンGF2045を意識したモデリング。

【4】考察としてつぎのようなことが議論されうるが、逐一の議論は別の機会にまわす。

- ◎世界共通語英語話者と多言語使用者はどう違うか?
- ◎ボーダーレス経済における多言語学習の経済と利得
- ◎何歳から始めるか? 適正な年代はあるのか? 何歳が限度か?
- ◎シニア向けの多言語学習とは? イベントリサーチャーとしてのポリグロット活動。
- ◎欧州27か国ではなされている22か国語
- ◎言語学習の機構化、Eラーニングの可能性、コミュニタリアンとしての多言語
- ◎ヨーロッパ言語共通参照枠CEFR
- ◎ポリグロットとは? むかし8か国語、いま20か国語
- ◎G7メジャー言語のCEFR適合教科書
- ◎アプリで加速する多言語学習
- ◎持つべきものはやはり友、聖書の効用

【5】結論

この研究が射程として持つ、欧米域への日本型イベントロジーの敷衍は、多言語活用を研究開発することで可能になる。特異点構造が多言語シャーマンの特徴を表し、日本型イベントロジーと海外イベントロジーの交流は、この特異点構造体に関する理解と議論が必要である。平城京1300周年、聖徳太子没後1400年をはじめとして、二国間**友好170周年事業、マージナルカルチャーイベント、大都市、地方都市における移民統合イベントにたいして適用できる。一方で、2018年の160周年事業ジャポニズム2018などの轍を超える必要もある。